

謝辞

序章 1

第1章 ヤン・スマッツと帝国主義的インターナショナリズム 31

第2章 アルフレッド・ジマーンと自由の帝国 73

第3章 民族、難民、領土 ユダヤ人とナチス新体制の教訓 111

第4章 ジャワハルラール・ネルーとグローバルな国際連合の誕生 161

終章 205

解説 「逆説」の理想的国際平和機構論 渡邊啓貴 219

訳者あとがき 235

原註 17

索引 1

凡例

- 1 本書は Mark Mazower, *No Enchanted Palace: The End of Empire and the Ideological Origins of the United Nations* (Princeton University Press, 2009) の全訳である。
- 2 原註（*で表示）は原著にあるとおり、巻末に一括して載せた。訳註（+で表示）は側註として奇数頁の左側に掲げた。
- 3 固有名詞の表記については、徒に現地音主義に固執せず、文脈から判断して好ましいと思われるものを採用した。
- 4 国際連合、安全保障理事会などについては、本文中で国連、安保理などのよく使用される略記も用いている。とりわけ、国連総会、国連憲章などにおいては例外なく国際連合でなく国連を使っている。ただし、国際連盟は略記を用いていない。これは四字からなる言葉の省略形が、しばしば戦後は一字目と三字目をつなげたものであるのに対し、戦前は下の二文字を使用したため略記が「連盟」となり、一般名詞の連盟と混同されやすいためである。なお、国連決議 (United Nations resolution) は国際連合のすべての機関が発することができ、実際にはほとんどが国連総会、安全保障理事会によって採択されたものである。本文中では、国連総会決議、国連安保理決議と表した。

謝 辞

著者は、ギアン・パカシユ、プリンストン大学のシエルビー・カロム・デービス歴史研究センター、そして同大の歴史学科にたいへんお世話になった。本書のかなりがそれに基づいている二〇〇七年度のローレンス・ストーン連続講演にお招きいただいたうえ、温かいもてなしを受けた。著者は幸いにもプリンストン大学で教えておられた晩年のローレンス・ストーン[†]の知己を得ることができた身であるので、ささやかとはいえ、本書を彼に献げられることを光榮に思う。著者は、連続講演のサポートと本書の出版でお世話になったプリンストン大学出版局に礼を申し上げたい。とりわけブリギッタ・ヴァン・ラインバーグは次々と届く原稿に目配りを利かせながら読んでくれたし、洞察力に満ちた示唆を与えてくれた。第2章は元々コロンビア大学で二〇〇八年度のツアコプウラス講演として行ったものである。お招きいただいたキリアコス・ツアコプウラスに感謝したい。著者はこうした問題をとくと考えるうえでいろいろ助けを受けたが、その方々にも感謝したい。コロンビア大学での学生たちとの議論、また同大の国際史研究センターでのセミナーにおける議論が何より役立った面があったことも記しておく。

序 章

われわれの編み出したものは完璧だとも、平和を揺るぎなく保障するものを創造したとも、私たちは口にすることなどとてもできません。なぜならわれわれの編み出したものは、ひとたび魔力や神秘的な力が加われれば「すぐさま目の前に飛びだしてくる」魔法の宮殿 (Enchanted Palace)、というわけにはまるでまいらないからです。けれども、われわれは試行錯誤の末に一つの道具を作り上げたのであり、人類が真剣に平和を望み、平和のためなら犠牲を払う覚悟があるのなら、その道具を使って平和を獲得する手立てを見つけうる、そう私は確信しているものであります。

——駐米イギリス大使にして、サンフランシスコ会議のイギリス代表団長代行を務めたハリファックス卿の一九四五年六月二六日の発言より。サンフランシスコ会議はこの日に幕を閉じた。

「国際連合の歴史に新たな章が始まった」。この自信に満ちた表現で、ブトロス・ブトロス・ガリー国連事務総長は冷戦の終結を歓迎し、それが彼の機構にもたらした「とてつもない好機」を賛美した。数十年にわたる超大国同士のにらみ合いは、彼の国連を蔑ろにしてきたが、ソ連の崩壊は、国連にやりがいのみならず、新たな意味合いをももたらしたのである。今や、国連の平和維持の役割を拡大させることができるし、国連軍兵士に付与する権限をより強いものにする事ができた。戦争で荒廃した国々から難民を新たな地に定住させるだけでなく、政治的和解の調停、官僚機構の再建、選挙の監視といった

ことにおいても能動的な役割を果たせるようになった。そのうえ、全世界の社会的・経済的發展を管理し、世界中の貧しい人びとに援助や助言を与える任務までもが、国連の肩に掛かってくることになった。加えて、人權を強力に保護し、広く人類を代表して加盟国の政に介入する合法性を有するのは国連だけであった。一九九二年の国連による報告書『平和への課題』(Agenda for Peace)は、「国連が、まさに過ぎ去った時代にそうであったように無力にされること^{まっさり}が、二度とあつてはならない」と高らかに宣言した。そこには新たな創造の時来るといふ夢があつた——まるで希望に満ちた一九四五年に時計の針が戻つたかのように。もっとも、そのような機会が実際に訪れていたとしても、あつという間に消え去つてしまつた。バルカン半島やアフリカにおける内戦、とりわけ一九九四年ルワンダでのジェノサイドは、国連の無力さを批判する者たちの怒りに火に油を注いだ。それを起点として国連の改革を企図した首脳部による一連の計画があつたが挫折してしまつているし、一方では、新たな、以前には考えられなかつた程の国連内部における汚職の積み重ねが明るみに出た。ビル・クリントン政権にせかされて、NATO(北大西洋条約機構)は安全保障理事会の承認なしにコソボを空爆し、人道的介入を名目に国連を無視するという先例がつくられた。二〇〇〇年代に入ると、ジョージ・W・ブッシュ政権は、新たな国家安全保障戦略を推進したが、そのなかの予防戦争の提唱は、国連創立の基本原理を平然と拒絶することを意味していた。アメリカ合衆国は以前にもロナルド・レーガン大統領の下で国際司法裁判所との結びつきを弱めたことがあつたが、今や二〇〇三年創設の新しい国際刑事裁判所にも背を向け、生物兵器に関する法的拘束力のある協定を合意に至らせる努力だけでなく、国際的な兵器管理体制をも損なつたのである。イラク攻撃の準備をしている間は、口先だけ国連に気を遣つていたが(それも主として同盟国である

イギリス政府を助けるためだった)、ブッシュ大統領領府は国連に対する侮蔑をほとんど隠そうともしなかった。国連が何を言おうとも、何をしようとも、イラク戦争へと進むことは明白だった。しかし、そのことによって国連を恃むに足らずと思つたのは、ひとりワシントンの単独行動主義者だけではなかった。というのも、イラク侵攻を行うという考えに圧倒的に反対していた他の多数の国々にとって、国連もまた、多国間主義や集団安全保障という原則を守る点で失敗を味わつたからである。一つ明らかになつたことがあつた。新たな世界秩序の中心として、ほんの短い間かけられていた国連への大きな期待が完全に消滅してしまつた、ということである。^{*2}

今日、国連の改革を訴える声には事欠かない。ならず者国家や他の国際的な無法者集団に対し、迅速な軍事行動を取れるよう国連が効率化されることを望む者もいる。おそらく、安全保障理事会の拡大、常任安全保障理事国の拒否権の弱体化、有名無実化した存在の軍事参謀委員会に息を吹き込むこと、といったところが考えられるだろう。かと思えば、人権侵害を犯した加盟国に対し、国連はより強力に働きかけ、手遅れになる前に(それと、滅多に口にはされない恐れだが、中国に乗つ取られる前に)いくつかの価値観、たとえば自由や民主主義などを世界中に刻み込むためにより多くのことを為すべき、と考える者もいる。国連に、開発目標と人権を融合させた「人間の安全保障」と呼ばれるものを促進せよとか、政府が自国民を虐待するような際には「世界市民」を保護するために介入する権利を主張せよ、などと求める声もある。しかし、国際情勢における中心的な役割を国連に取り戻させようといふどんな改革案

† 第3章一三五頁に出てくるように、ラファエル・レムキンの造語で *genos* (種族・民族) + *cide* (殺) からなる。

も、根本的に極端過ぎるという疑いが蔓延している。国連がなくなれば世界はより良いものになる、と
思っている者はまずいまい（もともと、アメリカのある保守系シンクタンクは、一九八四年に『国連なき世界
——国際連合が閉鎖されたら何が起きるか』（*A World Without a UN: What Would Happen if the UN Shut Down*）と題され
た研究を公にしたが）。しかし、国連に大きな信頼を抱いている者もまたほとんどいまい。安全保障理事
会が独裁国家によつて窮状に追い込まれたり、国連総会が独裁者のために立ち往生したりする国連が
「民主主義的平和^{*}」と呼ぶものを支持するために行動を起こせぬ場合には、何かを実行するためには国
連に頼らずに民主主義国家間で同盟を構築した方が早い——そんな風に影響力ある外交政策の専門家た
ちは語っている。

こうしたことは国際体制において国連が将来占める位置についての議論である。しかし、当然のこと
ながら議論は国連の過去についての認識に基づいている。実際のところ、現在の国連に対する激しい幻
滅というのは、創立者たちが想定していたと思われる水準に遠く及ばない、という絶望感と密に結びつ
いている。ブトロス・ガリ事務総長は、「国連憲章が元々想定していた……高潔な目標」を遅まきな
がら実現する手段であるからとして、国連が為すべきことについての一九九二年の己の拡張主義的なヴ
イジョンを正当化していた。評論家たちもそれに同意した。国連が定めた規則は、長い間機能を停止し
ていた。だからこそ、二〇〇三年春のアメリカ合衆国の政策を擁護していたある時事評論家は、「国連
は長の年月まるで進歩してこなかった」と口にしたものだ。続けて彼が述べるには、国連が時代遅れだ
とか、あるいはよく言っても「もたついている」とか非難できるほどに、世界の体制は端的に言つて進
展してきたのだ。ブッシュ政権はさらに辛辣だった。国連がサダム・フセインに厳しい姿勢で臨むこと

ができなければ、兩次世界大戦の戦間期の国際連盟と同じように、完全に蚊帳の外に置かれると予言していたのである。ブッシュ政権は、イラク侵攻は、一九三〇年代の轍を踏まないためだ、三〇年代のアピシニア危機、それだけでなくミュンヘン会談の轍をも踏まないためだと主張した*。

しかし、この論争全体において暗黙のうちになされた歴史認識というのは、驚くほど幼稚なものである。国連の過去については、支持者、批判者双方とも、基本的な文書もんじょをぞんざいにしか読んでおらず、かなり多くの思い込みがある。また、文書の草案作成に伴っていた雑多な動機に対する認識がきわめて乏しい。こうした文書の誕生の過程がわかる利用可能な学術論文でさえも、特殊な立場からの擁護や甘い考え方の度合いが通常よりも多いために価値が損なわれている。そうした学術論文では、インタナショナルリズムは一般的には肯定的なものとして描かれるし、グローバリゼーションは現代史のまさに潮流として書かれる。それらによつて誘導される思い込みは、地球共同体のようなものの出現は、望ましいのみならず必然的なものであるというものだ。出現に至るのは、諸国家の営為を通してかもしれないし、国家レベルとは離れた営為を通してかもしれない。あるいは公平で気高い公僕が配置されている国際的な機構・機関そのものの営為を通してかもしれない*。

こうした欲目にはもつともな理由がある。長年にわたり、戦後の国際秩序を研究する歴史家は、国連というテーマをあつさりとは無視してきた。とりわけ冷戦の、そしてアメリカ外交政策の研究者にとつて、国連は本筋と無関係ではないにしても、あまり重要ではないように思えたからである*。ふたたび国連を注目の的へと引き戻したのは、まずはジョージ・H・W・ブッシュ大統領が冷戦終結時に宣言した「新世界秩序」だった。次いで、それより遥かに大きな緊迫感をもつてまるで異なる雰囲気の中で生じた

ものが、その息子のジョージ・W・ブッシュ大統領の外交政策に衝撃を受けた知識人の反発であった。多くの歴史家をして、国連が重要なものなわけ——あるいは少なくとも、かつてはアメリカ合衆国にとって重要だったのはなぜか——について明らかにしようという気にさせたのは、誰でもないブッシュの息子の方だった。こうして歴史家たちは、ブッシュの内閣のなかにいるナシヨナリストのウルカヌス（バルカン）たちを批判する手段として、アメリカのインターナシヨナリズムや先見性のある多国間主義者の政治的手腕についての記事や学術論文を送り出すことが、自分たちの仕事であると見なすようになった。よって話しはおおむねこのように進むのだが、フランクリン・デラノ・ローズヴェルトが、一九四〇年代前半にアメリカ合衆国が世界的な指導力を得られるよう道筋をつけ、同時に国際的な支持を取り付けるためにアメリカ的価値観の好ましい面を押し出したのだった。現在にとって価値ある教訓を引き出すためには、ゆえに二一世紀初頭の視野の狭い単独主義者と、一九四五年の賢明で分別のあるインターナシヨナリストとの対比を強調することとなった。まもなくこれらの記事や学術論文の主人公たちは、未来を見通せる人物、英雄となった——当時より面白みがなく活気のない現代にインスピレーションを与えてくれる存在となったのだ。エレノア・ローズヴェルトやラファエル・レムキン、ルネ・カサンなどなど、国連、とりわけその人権に関わる制度が出現するなかで指導的役割を果たした人物たちは、個人的な献身や行動主義が何を為しうるかを思い起こさせるものとして、今では決まって引き合アッいに出されている。

ユートピアは無視されるべきではないし、国際連合やその前身である国際連盟のような国際機構と結びついたユートピア思想は、間違いなくユートピアの魅力を力強く伝えるものであった。ユートピア思

想はそれら国際機構に活力と支持とを与え、状況次第では政治力の貴重な源泉となった。しかし、歴史家たちが研究テーマであるユートピア思想と、自分自身のユートピア思想とを混同すると、簡単に惑わされてしまう。歴史から自分が望むものを読み取るというのは昔から行われてきたことであり、今日の人権活動家や人道主義的介入の提唱者が初めてというわけではない。しかし、ここ数年の間に出現してきたのは、国連が何をするために創立されたのかについて、きわめて偏った観方をしたり、国連の創立者たちがけっして応えるつもりもなかった期待を生じさせるような、大量の研究成果である。その結果は、むしろ国連が直面する危機を深め、国連が為し遂げてきたことや潜在能力の実態を、明らかにするどころか曇らせているのである。

今の時点でわれわれに必要なのは、国連の創立者たちが実際には何を胸中に抱いていたかをもっと醒めた目で見ることであり、国連がどのように一步を踏み出したか、どのような機構になるはずだったのか、ということについてあまり当然のものと決めつけないことである。われわれが一九四〇年代に遡ってみさえすれば、警報のベルが鳴り響くことだろう。というのも、当時の論者たちは新たな国際機構に對して、今日の歴史家の傾向に比してより慎重な見解を表していることに気づくからである。実際に、加盟を要請されている新たな国際機構は偽善に貫かれていると考えながら、一九四五年のサンフランシスコにおける創立会議[†]を後にした参加者もたくさんいた。彼らは、その国際機構の自由だの権利だのと

† 四月二十五日から六月二六日まで。正式には「国際機構に関する連合国会議」。国際連合(合原加盟国五ヶ国)の内ポーランドを除く五〇ヶ国が参加。

いう普遍主義的な修辭を、遺憾なほど不公平なものと見なしていた——つまり、世界の弱い者、貧しい者をどう支配するかについての短兵急な態度においては、枢軸国と所詮同じ穴の貉むじなであり、普遍主義的な修辭も、強大国からなる理事会の団結を覆い隠すものに過ぎないと見ていたのである。思慮深くも当事者たちは、それと同じような意見を打ち明けるのはお互い同士、書き記すのも日記という人の目に触れぬものに止めた。国連憲章の起草に深く関わったイギリスの歴史家で当時外務省のために働いていたチャールズ・ウェブスターにとって、国連とは「世界規模の機構にはめ込まれた強大国間の同盟」であり、その達成した最たるものは、強大国同士の関係を管理する機構を刷新したことだった。ウェブスターの上司で、国連事務総長が決まるまで代行を務めることになるグラッドウィン・ジェブは、アメリカ人の同僚が、サンフランシスコ会議で人権活動家たちを「欺き」、「今回の憲章で自分たちの目的が達成された」と思い込ませたその手腕を、皮肉を込めて賞賛した。これから見ていくように、こうしたことは話しの半面に過ぎない。強大国同士というのはごく稀にしか団結しないので、今も昔も強大国だからといって、いつでも自分勝手に振る舞えるわけではない。それでもこの話は、過去数年間において歴史的分析としてまかり通ってきた甘い考え方を是正するものとしての価値を持つている。^{*}

国際連合の成立への今日の関心こんじちを解釈しようとするいかなる試みにとつても、上の話しの持つ含蓄は深いものだ。テキストが自ずと語ってくれるわけではないし、国連の起源に関わる文書のようにひどく議論を呼ぶテキストの場合にはなおさらである。国連憲章、特にその前文は、世界人権宣言やジェノサイド条約とともに、ナチズムとの戦いのなかで確立された新たな世界秩序の基本命題を証するもの、と見なすことができる。あるいは、国連の創立者たちがけっして換金するつもりもなかった約束手形であ

るとも読み取ることまでできる。そうした曖昧さは等閑なまぢりにされてよいものではない。実際、新しい理想主義的な編纂資料について最近テクストクリティクをした者のいくたりかは、現在の人道的な行動主義の源を一九四〇年代半ばにまで遡ろうとするのは真実味を欠くと指摘している。一九四〇年代半ばと言え、人権について語ることは、重要な政策立案者にとっては、しばしば無策でいるための、そして真剣に介入に踏み切るのを「避ける」ための方便であった。たとえば、A・ブライアン・シンプソンは、力強い人権保護体制が最初に出現したのは、世界人権宣言（一九四八年一月に第三回国連総会決議二七号として採択）や国連によつてではなく、それより後の一九五三年発効の地域が限定されたヨーロッパ人権条約を通じてである、ということを示している。サミュエル・モインは、現代の人権保護運動は、早めに見積もつても一九七〇年代より前に遡ることはない、と示唆している。著者もまた別のところで、初期の国連の人権に関する修辞は、まるで異なる種類の人権保護体制へのそれまでの真摯にして本質的な取り組みを、米英ソ三強大国が意図的に放棄するのを覆い隠していたのだ、と主張したことがある。権利というものはいろいろな人がさまざまの意味に取ることができる。国連憲章の感動的な前文に賛同し、起草に誰よりも尽力したのは、南アフリカ首相にして白人入植者のナシヨナリズムのために青写真を引いたヤン・スマッツであった——そのことを思い起こせば、われわれ自身の抱く希望や夢を、われわれが語る過去の物語に依存させ過ぎてはいないかと氣遣う必要があるのは明白なことなのだ*。

国連の背後に隠された複雑に絡み合った理念やイデオロギーを正當に評価してこれなかったのは、歴史家に限るわけではない。それどころか、国際関係を専門とする学者の方が、その務めを果たしてこれられなかったのである。そうなつたのは、もっとも根本的な方法論のレベルにおいて、自分たちの学問

分野、国際関係論は国際政治の包括的な理論を生み出すことができるものであり、他の学問分野を援用する必要のない分野だと彼らが誇示したがったせいだったのかもしれない。極端な科学志向——科学こそ彼らの学問分野が到達したものだ——が、彼らをしてゲーム理論や合理的選択理論といった抽象概念を理想化せしめ、イデオロギーの役割を軽視させることになった。貧弱な知的成果を細かくみてゆくのはこの場にふさわしくない。ここで心に留めておく必要があるのは、そうした研究方法をとっていたがために、国際情勢において理念や哲学について真剣に議論する可能性を排除してしまった、ということである。たとえば二〇世紀半ばのナチズムとコミニズムと自由民主主義との全面的で壮大な闘争が、費用対効果のリスク分析に基づいて説明できてしまう、と言わんばかりであったのだ。^{*10}

しかし、この問題はますます深みにはまっている。出発時点から、国際関係論という専門分野は、現実主義として知られている学説の姿をとって、一九四〇年代に理想主義的なインターナショナルリストの主張に「対抗して」出現したのだし、ウォルター・リップマン、ジョージ・ケナン、ハンス・モーゲンソーのような当時の論者でさえ、国際機構などという考えはキマイラのようなものだとなしなしたものだ。今日の左派の論客のいくたりかと同じように、彼らは国際機構を、せいぜいがとこ、強大国の利益のための合法的な組織に過ぎないと見なしたのである。もちろん、国連は「グレートパワー・ポリティックス」が生み出し、主としてその道具として利用された、という考えには大いに真実味がある。かといって、よって全貌が見えるというわけではけつしてない（何せそうなるのをあてこんでいたウィンストン・チャーチルは失望させられたのだ）。抽象的に聞こえるだろうが、たとえその考えが事実であったとしても、歴史のある時点でいくつかの大国が、自国の安全保障上必要なこととして国際機構の一員となるのも止む

をえまいと捉えていた理由を知るのは、今でもやはり重要なことであろう。^{*11}

一九七〇年代、ブレトン・ウッズ体制が崩壊しアメリカ合衆国の覇権に影が差した後、国際関係の学問分野はようやく真剣に「制度」というものを視野に入れ始めた。学界でネオリベラルな新制度論として知られる新しい研究方法は、IMF（国際通貨機関）、WB（世界銀行）、WTO（世界貿易機関）のような機関が加盟国のために何を行っているかを分析し、それらの機関がアメリカ主導による戦後の資本主義復活にどの程度支えになったかを議論した。その結果をもって、今日の学者たちは、国家がなぜ単独行動主義的政策ではなく多国籍主義的政策を選択するのかの説明を与えている。ただ、上述したような理由によって、彼ら学者たちは普通、イデオロギーや文化を背景にした多国籍主義の理念や哲学の分析ではなく、駆け引きの当事者たちの「選択」を念頭にしてそうした説明をしている。ただし、すでに遠回しながら言及した九・一一以後の歴史家に似て、彼らの狙いは、ジョージ・W・ブッシュ政権が追求したような単独行動主義は、戦後アメリカ外交における合理的な多国籍主義の伝統にそぐわないことを論証することにある。ただ、そうした学問分野がアメリカの政策立案者を含んだ読者に向かって国際機構が「現実的な」利益を提供できる理由を示すことを意図しているにも関わらず、われわれの客観的観察から明らかになるのは、国連に関しては具体的にほとんど述べていないことである。この学問分野は、単純なことだが、国連を極めて重要な組織とは見なしていない。最近バラク・オバマ政権における国務省の政策立案責任者に任命された政治学者は、国連ではなく、政府間の国家の枠を超えた接触や、NGOが、現実的な「新世界秩序」^{*12}を構成していることを示唆したが、彼女は「中央集権型の国際制度を伴わない国際的な法治」なるものを待ち望んでさえいる。

国連への疑念のなかには、アメリカのリベラルたちの、国連がイデオロギー的に雑多であることへの不信感から生じているものもあるだろう。国連では、独裁者が民主的に選ばれた政治家と、また独裁主義とか共産主義の代表団員がリベラルや社会民主党の代表団員と親睦を深めたりもするが、これは人権の普遍化に関心を持つ時代において、けっして好ましいものではないこととしてアメリカのリベラルを悩ましている。社会科学は、ガヴァナンスだの、ベストプラクティスだのといった概念や、マネジリアルイズムの用語を駆使することによって、政治にあからさまに言及するのを避ける無菌化された専門用語をますます使うようになっていくが、そうすることによっても、書き手の胸の奥深くに根づいた価値観をなかなか覆い隠せはしない。民主主義国家同士であればおそらく戦争にまで至らないという趣旨の議論に基づいた、いわゆるリベラルな「民主的平和論」というテーゼは、現代に共通する標準的な志向を反映している。このテーゼにおいて、リベラリズムというものは市民権を得ているし、現代世界の難問に対処しうる政治的合理性を持った唯一の形態として提示されている。民主国家が一致団結することを通して平和を広めようという——さらにおそらくは、人によっては世界中に民主主義を広めようという——議論をする際に、(真の先駆者はジョン・スチュアート・ミルであるが)イマヌエル・カントが引き合いに出される。こうした傾向から解釈すると、アメリカ合衆国のリベラリズムは非暴力的で実用本位なものにされており、そこにイデオロギー的要素はまるでなく、帝国や支配といったより強圧的な伝統からは心休まるほど超然としている。政治学者のG・ジョン・アイケンベリーの言葉にいわく、「つまところ、アメリカ人は世界を支配するより、規則に則った世界を創る方により関心があるのだ」。そのうえ、アメリカ人は、「畢竟するところ近代なるものに至る一つの道があつて、しかもその道は本質的

にリベラルな性質のものだ」というアイケンベリーの言葉にふさわしい歴史を持つている。オバマ政権のアメリカはジョージ・W・ブッシュ政権のときとかなり異なる価値観を内包しているように、少なくとも外交政策の一部の大物理論家の胸の裡うちでは、オバマ政権のアメリカも依然ゲオルク・ヘーゲルばりの「世界精神」を体現しているのだ。^{*13}

よって、多国間主義や民主主義国家の結合はアメリカ政治において党派を超えて通用するようになってきたインターナショナルトの見解であるが、それだからといってアメリカ人を国連に融和させるどころか、現在の国連が人権拡大路線の民主主義国家の同盟関係のあるべきモデルとかけ離れているからこそ、アメリカ人はいつそう国連の存在価値に疑義を挟むようになってきたのである。世界を、ウッドロウ・ウィルソン大統領の名高い明瞭な発言であるが「民主主義にとって安全」にしたいという願望が、ブッシュの単独行動主義で実現されたのか、それとも否定されたのかについては議論の余地もあろう。しかし、ブッシュの単独行動主義で否定されたと考え、なおかつ国際機構の価値を信じている者でさえ、国連は自由を投影する手段としてはひどく貧弱な媒体だと見なしている。そして、いずれにせよ、こうしたことはすべて根本的にアメリカ外交政策の方針はどうあるべきかという議論につながる（その議論は、^{似非}歴史的、^{似非}科学的用語で言い表されているが）。国連のイデオロギー上の起源がどこにあるのか、という点に関心のある者にとって、この議論から得られるものはまずあるまい。^{*14}

ブッシュの単独行動主義で否定されたと考える者にとって、ウィルソン主義は明らかに出発点の一つであり、現代的なインターナショナルト的思想が基準として依拠すべく立ち寄り最初の港となる。とはいえわれわれはウッドロウ・ウィルソンに、その死後に負わされた今一つの役割、より良いアメリカ

を象徴するという重荷まで押しつけては酷であろう。後述するように、ウィルソンの場合名声があまりにも高かったので、彼の待望した「権限を備えた国際的な共同体」のきちんとした計画を名声に釣り合うように明瞭に表現しようにも、力量が追いついていかなかったのである。彼は新たな民主的な世界秩序を目指していたのか、あるいはヨーロッパに平和をもたらすのに必要なものに傾注していたのか？

民族自決が世界中で適用できると信じていたのか、もしそうだとしていっでできるようになると考えていたのか？ 実際が存在していたような形での、輪郭のはっきりしたアメリカ流のインターナショナルイズムを——急進的な平和主義であれ、テディ・ローズヴェルトの力任せの帝国主義的な文明化の使命であれ、国際法を通して仲裁するという発想であれ——（現在ウィルソンを魅らせようとする者たちも同じだが）ウィルソンは無視する傾向があったし、彼自身の思想の曖昧さは、故意ではなかったにせよ、その後の時代の論者たちが彼がなしたいくつもの言明のなかから選り抜くのを許すという結果を残した。^{*15}

国際連盟、ひいては二〇世紀における国際機構の全体的な体系の成立過程において、少なくともウィルソンと同じくらい重要だったが（またウィルソン自身にとっても重要だったが）、間違いなく彼より軽視されているのはイギリスの帝国主義的思想の寄与である——そう著者は指摘したい。アメリカ合衆国がまだまだ二級の大国であった一九世紀終わりに、イギリス帝国は世界の最強国^{ヘゲモン}であり、国際機構についての考えが世に出た重要な場所の一つであった。これ以降のページで提示するものは、一つの主張の概略に過ぎない。国際連盟や国際連合のイデオロギー上の起源に関する話を、そっくり提供するのが目的でないのは確かである。けれどそれは、起源にまつわる話しのなかで軽視されてきたが有用な部分であり、人によってはいくつかの点で決定的に重大な部分だと主張するかもしれない。なぜなら、結局国際連盟

と国際連合双方に対する世界の歴史学的関心のかなりの部分は、イギリス帝国の最終段階にそれらがどんな影響を与え、どのように抜き差しならぬ関係になったかにあるからである。

そういうわけで、具体的に言うとき本書では、関連しあう二つの歴史上の定説に異議を唱えたい。一つ目は、アフロディテが泡から生まれたのと同じ様に、国際連合は第二次世界大戦のなから生まれたのであり、純粹であつて、大戦前の失敗作の国際連盟とのいかなる重要なつながりにも毒されていない、というものである。そして二つ目は、国連がなによりアメリカのものであり、公開の討議の場でも秘密の話し合いにおいても他の国々はほとんど役割を果たしていないところで生み出された、というものである。そうではなく、著者としては国際連合を次のように描写したい。国際連合は国際連盟から始まった国際機構の歴史の本質的には続きの章であり、国際連盟を通じて「帝国」という問題や、イギリス帝国のとりわけ最後の数十年間の話しだがそこで生まれた「世界秩序」というヴィジョンと結びついていたのだ、と。

というのは、国際連盟が一九三〇年代終わり頃までには政治的に有害になっていったということは第二次世界大戦中も大戦後もけつして公には認めるわけにはいかなかったが、国際連合がさまざまな点でその前身の国際連盟の延長線上にある、というのが事実だからである。一九四二年春、新しい戦後機構の概要を作成するためのアメリカ国務省高官会議においては、一九一八年にヤン・スマッツが国際連盟の輪郭を記した小冊子を「今日でも驚くほど適切」と見なしたのだが、何のことはない、その会議に関わった専門家には、地理学者のイザイア・ボウマンや委任統治領の権威のベンジャミン・グリグのように、前回の試み、国際連盟の創立にも深く関わっていた者たちがたくさんいたのだった。影響力のあるアメ

リカの政策提言グループのCSOP（平和機構研究委員会）は、ワシントンにおいて、戦時下での将来政策の立案を促進するのに重要な役割を果たしたが、実はこの委員会は一九三〇年代終わりの時点ですでに「国際連盟協会」（League of Nations Association）と提携するウィルソン主義のインターナショナルリストによって実質的に立ち上げられていたのである。CSOPのメンバーの一人であるジョン・フォスター・ダレスは、アメリカ合衆国での議論の白熱ぶりに慣れていたが、戦時下のロンドンでは「事実上国際連盟の復活についてはまったく考えられていない」のを知った。しかしそれは誤りであった。というのは、ホワイトホールで新しい国際機構の計画を持ち込む政策立案者には、前にも国際連盟設立に関わっていたのと同じ人物がたくさんいたからである。チャールズ・ウェブスターは、一九四六年のクレイトン講演で、国際連盟が「国連憲章の起草に関するあらゆる議論を支配していた」ことの実例について言及している。^{*16†}

したがって、第二次世界大戦後に誕生したものが、当時流布していたどの代替モデルともまるで似ていなかったのは、驚くべきことではない。ことごとく盛り込まれなかった例として次のようなものがある。げられよう。ローズヴェルトの構想の「四人の警察官」^{††}が調整の労をとる小さな核となり、強力な地域ごとの評議会を運営するというシステム。公共心に富む人権活動家ないしはテクノクラートによって運営される世界政府。一時アドバルーンをあげられていた民主主義国の同盟、など。よって第二次世界大戦後に誕生したものは基本的に、諸国家の連合であった国際連盟の焼き直しであり、新機軸と呼べるほどのものは、一九四四年にチャールズ・ウェブスターが概説しているが原則に付随してまず優先すべきこと、つまり「機構そのものの精密な形態よりも、アメリカ合衆国とソ連が恒久的な国際機構に加盟す

ることこそが重要だ」というものだった。ダンバートン・オークス会議17の後に、『ニューヨーク・タイムズ』紙は「国際連合 (United Nations) と称されるであろうが、国際連盟という考え方への回帰」^{*17}を歓迎したものだ。

三巨頭の戦時中の同盟関係を平和時にまで持ち込むために必要なことを行ったのが、国際連盟と大きく異なる点だった。拒否権を發揮する権限が三大国と他の二つの安全保障理事会常任理事国に与えられたのは、その成り行きだった。むしろここから重要な結果が生じた。強大国は、国際連盟の時よりは進んで国際連合を支持し（国連の側は強大国に逆らって活動することはできないのだから）、同時に国際連合を喜んで無視した（これまた同じ理由からである）。また他にもいくつか違いがあった。すなわち、国際連合は国際連盟にあった「集団権」を廃棄した。国際連盟よりも国籍をはじめいろいろな意味での「ナショナルイデオロギ」を尊重した。そして文明世界の公平性の表れとしての「国際法」に対する信頼は下火になった。

序 章

† American Association for International Cooperation と League of Nations Non-Partisan Committee が一九二三年に合同、翌年に League of Nations Association と改称。

‡ 「国連憲章の成り立ち」(The Making of the Charter of the United Nations) という演題で講演している。クレイトン講演は、キングス・カレッジ・ロンドンで一九〇七年から続いている。

††† 一九四二年一月一日に亡命政府を含めて連合国二十六ヶ国により署名された連合国共同宣言では、第一次世界大戦での連合国の呼称 Allies の代わりに United Nations をローズヴェルトが使用した。また、ローズヴェルトはイギリス、ソ連の反対にもかかわらず中華民国をも四大国＝四人の警察官に加えた。一九四四年八月から一〇月にかけて、ワシントン郊外のダンバートン・オークスで行われた。一度目の会談は米英ソ、二度目の会談は米英中で行われた。